語構成による漢語動詞の自他使用の予測可能性

形容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞の場合

張志剛

1　はじめに

動詞の自他の区別は日本語学習者にとって重要な問題である。しかし、漢語動詞は常に「漢語＋する」という語形を取るので、和語動詞とは異なり、語尾の変化から動詞の自他を予測することができない。そこで、語幹の漢語に注目し、その語構成を動詞の自他の予測と結びつける方法が考えられる。漢語動詞の語構成を論じた代表的なものに野村（一九九九）がある。野村（一九九九）では、(1)のような基準に基づき、構成要素の品詞性と構成要素間の関係によって、漢語動詞の語構成を22のタイプに分けている。

(1) a　品詞性：事物類(N)、動態類(V)、様相類(A)、副用類(M)、接辞(s)

b　構成要素間の関係：補足関係（＋）、修飾関係（＞）、並列関係（・）、対立関係（－）、反復関係（＝）

c　語構成パターンの例：N＋V（骨折など）、A＞V（軽視など）、V・V（引退など）、V－V（開閉など）、A＝A（清々など）、Vs（消化など）

様相類(A)と動態類(V)で構成される「A＞V」タイプの漢語動詞の自他を観察すると、(2)に示すように1つのパターンに統一

されず、自動詞、他動詞、自他両用動詞のいずれも存在する。このことは、漢語の語構成によってだけでは漢語動詞の自他を特定できないことを示している。

(2) a 大破、高揚　　自他両用動詞
　　b 激怒、高騰、大勝、近接　　自動詞
　　c 軽視、新築、詳述、明記　　他動詞

また、同じ様相類(A)と動態類(V)で構成される「拡大、縮小」などの漢語動詞は、野村（一九九九）の分類では触れられていないが、これらは動態類(V)の結果として様相類(A)が成立するという意味関係を表すと解釈できる。(3)に示すように、このタイプの漢語動詞も自動詞、他動詞、自他両用動詞のいずれも存在する。

(3) a 拡大、縮小、改善　　自他両用
　　b 減少、衰弱、伸長　　自動詞
　　c 改良、増強、延長　　他動詞

以上の現象から見れば、語構成と漢語動詞の自他は単純な一対一の関係ではなく、一対多または多対一の関係になることがわかる。漢語動詞の語彙レベルの内部構造から、統語レベルの自他使用を予測することは、単なる構成要素の品詞性とその構成関係だけでは困難な部分が残っている。そこで、本稿は漢語動詞の語構成をより詳しく検討し、そこから漢語動詞の自他を予測する可能性を検証したい。

具体的には、第2節では、本稿において漢語動詞の自他の判断基準と、語構成の項目を定める。第3節では、形容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞を取り上げ、漢語動詞の内部構造と統語的な自他使用との関係を検証する。

2 考察の前提

具体的な考察に入る前に、分析の前提となる漢語動詞の自他の判断基準および語構成の項目について述べておく。

2―1 漢語動詞の自他の判断基準

動詞の自他を判断する主な方法として(4)が挙げられる。

(4) a ヲ格を取るか否か
　　b「直接受身」の成立の可否
　　c 形態的な自他対応
　　d 構文的な自他対応

漢語動詞は常に「漢語＋する」という語形を取るため、cは自他の判断に適さない。本稿では、動詞の取る格と動詞の構文関係という形式的な観点から漢語動詞の自他を判断する立場を取る。すなわち、漢語動詞の自他の判断基準として(4)のaとd

を重視し、ヲ格の目的語を取る漢語動詞を他動詞、ヲ格の目的語を取らない漢語動詞を自動詞とする。また、(5)に示すような構文的な自他対応になる漢語動詞を自他両用動詞とする。（bの「直接受身」が作れるかという基準は副次的な判断手段として考える。）

(5) a　N_1がN_2を Vt（他動詞）

　　b　　N_2が Vi（自動詞）

例えば、(6)の「増強」は目的語「軍備」を取る他動詞であり、(7)の「高騰」は変化の主体「価格」しか取らない自動詞である。(8)の「拡大」は自他両用動詞である。

(6) 韓国はこれに合わせて軍備を増強する。毎日新聞二〇〇四／一二／一七（他動詞）

(7) 一方、野菜の価格が高騰し、大きく消費が落ちたことから「食料」は同一・〇％減だった。毎日新聞二〇〇四／一一／三〇（自動詞）

(8) a 新潟県中越地震で新潟県は9日、これまで30市町村を対象にしていた災害救助法の適用地域を拡大し、三条市や加茂市、上越市など24市町村を新たに加えることを決めた。毎日新聞二〇〇四／一一／〇九（他動詞）

　b 農村の高齢化に伴う耕作地の放棄や温暖化による積雪の減少などによって活動地域が拡大したと見られる。毎日新聞二〇〇四／一二／一一（自動詞）

ヲ格の有無による判断方法で自動詞になる漢語動詞の中には、「面会、握手」などのようにト格を取るもの、「就任、波及」などのようにニ格を取るものも少なからず存在する。構文的に見れば、このような漢語動詞が取る項の数は他動詞と同じであり、ガ格しか取らない自動詞とは異なる。しかし、意味的に見れば、ト格やニ格を取る自動詞がト格名詞やニ格名詞に対する働きかけが弱く、他動詞とも違う。本稿では、このような漢語動詞は自動詞と見ることにする。

2―2　語構成の定義と構成項目

本稿では、漢語の語構成を、構成要素の品詞性と構成要素間の関係から考える。

構成要素の品詞性は、まず野村（一九九九）に倣い、「事物類(N)、動態類(V)、様相類(A)、副用類(M)、接辞(s)」の5種類に分類する。さらに、(9)のように、各種類を下位分類する。

(9) a 事物類(N)→具体名詞、抽象名詞

　b 動態類(V)→自動詞、他動詞、自他両用動詞

　c 様相類(A)→感情形容詞、属性形容詞

　d 副用類(M)→状態副詞、程度副詞、陳述副詞

構成要素間の関係は、野村（一九九九）の5分類である補足

関係（＋）、修飾関係（＞）、並列関係（・）、対立関係（－）、反復関係（＝）に加え、「動補関係」を立て、構成要素が動作とその結果の関係になる「打倒、説明、改善、拡大、縮小」などを表す。「動補関係」は「V≪A」または「V≪V」で表記する。また、動作とその結果に解釈できる「短縮、軽減」なども「動補関係」の一種とし、「A≫V」で表記する。

また、事物類(N)と動態類(V)で構成する漢語動詞の場合、両者の格関係も構成要素間の関係と言える。動補関係（「V≪V」、「V≪A」、「A≫V」）になる漢語動詞の場合、統語的な意味役割が構成要素の意味関係と関連付けられる（この点については3―3で詳しく述べる）。

以上をまとめると、本稿でいう語構成は表1に示すような項目を含む。

表1　漢語動詞の語構成の項目

漢語動詞	前要素	後要素	結合関係	格関係	動詞要素の自他	…
握手	V	N	V＋N	NをV	他動詞	…
激怒	A	V	A＞V	―	自動詞	…
拡大	V	A	V≪A	―	自他両用	…
…	…	…	…	…	…	…

2―3　構成要素の品詞性および結合関係の判断方法

二字漢語動詞の構成要素の品詞性や意味に関しては、それぞれの構成要素（漢字1字）に関する『新明解国語辞典』（第五版）の記述を参考にした。例えば、「激減」を構成する「激」「減」については、次のように記述されている。

(10)　a「激」①勢いが強い。はげしい。「激烈・激流・激戦・激突」②変化が大きい。はなはだしい。「激増・激変」③強く心を動かす。「激励・憤激・感激」

『新明解国語辞典』第五版　p417より

b「減」減ること。減らすこと。「一割の減／減少」

『新明解国語辞典』第五版　p428より

(10)aの記述から、「激」は、①と②の場合が形容詞性要素、③の場合が動詞性要素とみなす。また、(10)bの記述から、「減」は自他両用の動詞性要素とみなす。（日向（一九八一、一九八二）も、漢字の品詞性に関する記述が詳しく参考になる。）

結合関係については、漢語動詞の意味と照らし合わせながら、構成要素の品詞性を確定した上で、その結合関係を定めていく。例えば、同じ「激」を含む「激減」は「A＞V」のパターンに、「激励」は「V・V」のパターンになる。

3　語構成と漢語動詞の自他との関係

この節では、特定の語構成のパターンから、漢語動詞の自他を予測できることを検証していく。具体的には、形容詞性要素（以下「A」）と動詞性要素（以下「V」）で構成される漢語動詞を対象に、語構成による下位分類を行い、特定の語構成のパターンと漢語動詞の自他との関係を検討する。

3—1　修飾型漢語動詞と動補型漢語動詞

形容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞は、形容詞性要素と動詞性要素が修飾関係（A＞V）になるか、動補関係（V《AまたはA≫V）になるかによって2分類できる。修飾関係の場合（以下「修飾型漢語動詞」）は「高騰、激減、軽視、詳述」などのように、形容詞性要素が動詞性要素の前に位置する。これに対して、動補関係の場合（以下「動補型漢語動詞」）は「拡大、縮小、減少、増強」などのように、形容詞性要素が動詞性要素の後に来るのが一般的であるが、「短縮、肥育、軽減、低減」のように形容詞性要素が動詞性要素の前に位置する語も存在する。陳（2001：258）では、「すこし歴史の古いものとして「拡大、縮小、延長、増強」のような中国語の造語パターンに合う語が挙げられる。逆に考えれば、「短縮、肥育、軽減、低減」などは日本語の連用修飾の語順に合うように、非常に新しく出来たものとも言えよう。」と指摘している。

修飾型漢語動詞と動補型漢語動詞を区別するもう一つの手段として、「動詞＋て、形容詞＋なる／する」という文構造に展開できるかが挙げられる。例えば、「拡大する」は「拡げて大きくする」と言い換えられるので動補関係、「激減する」は「＊減って激しくなる」とは言い換えられないので修飾関係となる。

以下では、修飾型漢語動詞と動補型漢語動詞のそれぞれについて、語構成から漢語動詞の自他決定の要因を探る。

3—2　修飾型漢語動詞

修飾型漢語動詞は、(11)に示すように、動詞性要素の自他によってさらに3分類できる。

(11) a　激怒、高騰、大勝、近接など　動詞性要素が自動詞（A＞Vi型と表記する）

b　軽視、新築、詳述、明記など　動詞性要素が他動詞（A＞Vt型と表記する）

c　激減、大破、高揚、密閉など　動詞性要素が自他両用（A＞Vti型と表記する）

(11)の各パターンに属する漢語動詞の自他を観察すれば、以下のような結果が得られる。

(12) a　A＞Vi型の漢語動詞→自動詞

b　A＞Vt型の漢語動詞→他動詞

c　A＞Vti型の漢語動詞→自他両用動詞（大破、高揚、密閉）、自動詞（激減）

修飾型漢語動詞の場合、その自他は動詞性要素の自他と一致する。問題は動詞性要素が自他両用動詞になる場合である。この場合、漢語動詞が自他両用動詞になるとは限らず、「激減」のように自動詞になることもある。類似の現象が「激増、激変」などにも見られるので、形容詞要素の「激」が持つ何らかの性質が漢語動詞の自他に影響を及ぼすと考えられる。この点については今後の課題としたい。

3―3　動補型漢語動詞

動補型漢語動詞は、主体の動作または変化を表す動詞性要素と、主体の動作や変化に伴って客体または主体に生じる変化の結果を表す形容詞性要素で構成される。形容詞性要素と動詞性要素の出現順序によって、「拡大、縮小」などのような「V≪A」タイプと、「短縮、軽減」などのような「A≫V」タイプに分けられる。(13)に示すように、「A≫V」タイプに属する漢語動詞は数が少なく、自他両用である漢語動詞の自他は動詞性要素の自他と一致する。

(13)　軽減、低減、短縮　動詞性要素が自他両用

一方、「V≪A」タイプの漢語動詞は、(14)に示すように、動詞性要素の自他によって大きく2つのパターンに分けられる。

(14)　a　説明、補強、解明など　動詞性要素が他動詞（Vt≪A型と表記する）

b　拡大、減少、増強、改正、短縮など　動詞性要素が自他両用（Vti≪A型と表記する）

Vt≪A型の漢語動詞は語数が少なく、他動詞である動詞性要素の自他に従うが、Vti≪A型の漢語動詞は語数が比較的多く、その自他も(15)に示すように、自他両用である動詞性要素の自他とは一致しない。

(15)　a　減少、伸長→自動詞

b　増強、延長、改正、改良→他動詞

c　拡大、縮小、増大、改善→自他両用動詞

Vti≪A型の漢語動詞における、このような不規則な自他の分布は、動補型漢語動詞に潜んでいるもう一つの構成関係に影響されたのではないかと考えられる。表2は動詞性要素と形容詞性要素の担う意味役割による動補関係の漢語動詞の再分類である。

表2　動補関係の漢語動詞の分類

動詞性要素	形容詞性要素	
	主体の変化結果	客体の変化結果
主体の動作	×	○
主体の変化	○	×

「主体の動作―客体の変化結果」という意味関係を含む(16)(17)の「増強、改正」は、他動詞として使われる。

(16) 3月にトルコ工場を増強し、05年にはチェコで合弁工場が操業する。毎日新聞二〇〇四／〇二／二三

(17) 農水省は10日、鳥インフルエンザ防疫マニュアルを改正した。毎日新聞二〇〇四／〇三／一一

また、「主体の変化―主体の変化結果」という意味関係を含む(18)(19)の「拡大、縮小」は自動詞として使われる。

(18) またテレビ番組を再生・録画できるビデオ機器も登場して、ソフト数が一気に増え、市場が拡大した。毎日新聞二〇〇四／〇四／二一

(19) しかしこれからは、総人口の減少で都市が縮小していく。毎日新聞二〇〇四／〇二／二三

このように、「主体の動作―客体の変化結果」という意味関係だけを含む漢語動詞は他動詞、「主体の変化―主体の変化結果」という意味関係だけを含む漢語動詞は自動詞になり、両方を含む漢語動詞は自他両用になると考えられる。

(16)と(17)では、「増強、改正」の客体である「工場、マニュアル」は、自らが「増えて強くなる」「改まって正しくなる」ことが考えられないので、「主体の変化―主体の変化結果」の意味関係になる自動詞として使われないのである。

一方、自動詞として使われる「減少」は、「主体の動作―客体の変化結果」という意味関係になる可能性を持つとも考えられる。しかし、(20)のように、「売り上げが減少した」という事柄は話者にとって好ましくないことなので、主体から積極的に働きかけて「少なくなる」ようにするという他動詞用法が考えにくいのである。

(20) だが、現実には、白い防護服姿で活動する作業員の姿が連日、新聞やテレビで報道され、鶏肉の売り上げが減少した。毎日新聞二〇〇四／〇六／一六

最後に、「改正、改良」などの他動詞と違って自他両用動詞になる「改善」を見てみよう。「改善」と「改良」は構造的にも意味的にも極めて近い語でありながら、自他は異なる。実例を観察すると、「改良」の場合、(21)のように、客体になる名詞が「水着、機械、施設」など人間が作り出したものであるのが一般的である。このような物理的な存在は自ら進化を遂げることが考えられないので、「改良」は自動詞として使われないのだと考えられる。一方、「改善」は、(22)aのように、客体になる名詞が「収支、環境、関係」など人間が営む人間社会の一部を表すものであるが普通である。人間性が潜んでいるこれらの名詞は自動詞文の主体になれるということだと考えられる。

(21) 同社は競泳でも、シドニー大会で話題になった「サメ肌

水着」を改良し、水の抵抗を減らした新製品を英国スピード社と共同開発した。毎日新聞二〇〇四／六／二一

(22) a 借金ずくめの公共事業をやめて、毎年の予算収支を改善していく。毎日新聞二〇〇四／〇一／一一

b テロやSARSの影響で引き続き出国者数が減少する一方、外国人入国者が増えて旅行収支が改善した。毎日新聞二〇〇四／〇一／一四

3—4 まとめ

形容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞は、修飾型漢語動詞（A＜V）と動補型漢語動詞（V≪AとA≫V）に分けられ、その自他は次のように決まる。

修飾型漢語動詞（A＜V）の場合は図1のようになる。

動補型漢語動詞（V≪A）の場合は図2のようになる。

4 おわりに

本稿では、形容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞の語構成についてより詳しく検討し、動詞性要素の自他及び形容詞性要素と動詞性要素との意味関係によって漢語動詞の自他が予測できることを示した。

図1 修飾関係になるAV型漢語動詞の自他

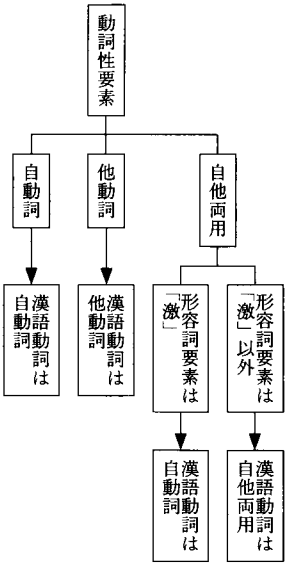
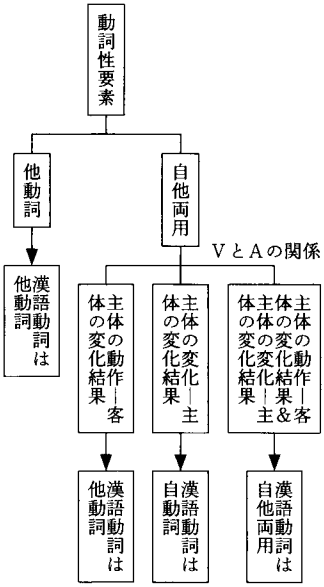


図2 動補関係（V≪A）になるAV型漢語動詞の自他



参考文献

影山太郎（一九八〇）『日英比較　語彙の構造』松柏社
小林英樹（二〇〇四）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
斎藤倫明・石井正彦（編）（一九九七）『語構成』ひつじ書房
陳力衛（二〇〇一）『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
西尾寅弥（一九七二）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
野村雅昭（一九九九）「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊行会（編）『日本語研究と日本語教育』明治書院
日向敏彦（一九八一）「動詞性漢字の造語機能」上智大学国文学会（編）『国文学論集』15
日向敏彦（一九八二）「機能別漢字表――造語力の考察から――」森岡健二他（編）『講座日本語学第六巻』明治書院

国語辞典

『新明解国語辞典』第五版　三省堂、一九九七

（ちょう　しこう／博士後期課程）